

沖縄県民斯克戦へリ

JJ1SXA/池

「沖縄県民斯克戦へリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」、これは、自決前の大田実海軍少将の決別電の末尾の言葉である。

大田実少将は、海軍最先任者として沖縄根拠地隊司令官を務め、米軍上陸時に約1万人の部隊を率いて沖縄本島小禄半島での戦闘を指揮するも、米軍の攻撃により司令部は孤立し、昭和20年6月13日那覇小禄地区豊見城にあった海軍壕内で拳銃で自決。

自決する直前の6月6日に海軍次官宛てに発信した電報、決別電は、当時の訣別電報の常套句だった「天皇陛下万歳」「皇国ノ弥栄ヲ祈ル」などの言葉は無く、ひたすらに沖縄県民の敢闘の様子を訴えている。

そして、自決前日(6月12日13:35)、最後の電報発信。

一、朝来、敵戦車および歩兵、当司令部壕外に蟻集し、煙弾を打ち込みあり

二、我方、およそ刀をもって戦いうる者は、いずれも敵に当たり、然らざる者は自決しあり

三、74高地2か月余りの奮闘も、本日をもって終止符を打つものと認む

この後、16:19、「これにて通信連絡を絶つ」と発信。

これだけ激しい戦闘を戦い抜いて自決したが、なおかつ、沖縄県民のことを考え、思いやって、決別電を、冒頭の言葉で結んでいる。

激戦地だった沖縄には、戦跡と共に記念館や慰霊の塔が沢山建てられ、沢山のガマも整備され保存されている。

一番有名なのは(?)ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館かも知れませんが、残念なのは、資料館に展示されているもの、あるいは説明文等が、旧日本軍を悪と決め付けるものに偏っている、国家予算(国民の税金)で建立されたものである、そうだった理由は、当時の大田知事を含め建設委員の大部分が左翼であったためだ。

観光業者は、そんなことには関係無く知名度の高い場所を薦める、高校生の就学旅行コースも例に漏れずで、偏った沖縄戦の歴史観を植えつけられかねません。

戦争末期、追い詰められ逃げ場を失って、多くの人が、ここから自ら身を投じた摩文仁の丘(ここも訪れる人は多い)、同情を禁じ得ませんが、決別電にあるように他の姿もあるのです、過酷な沖縄戦の全貌を知ってもらいたいものです。

大田少将が自決した旧海軍司令部壕跡は訪れる人も少ないようです、沖縄県民を思って、中央の司令部へ直言したこの人を県民はもっと慰霊しても良いかと思うが、沖縄左翼にとっては軍人を慰霊するなど、もっての他のようです。

(9,Jul,2013 記)